呪詛喰らい師（カースイーター）

蒼井村正
挿絵／或十せねか

あとみっく文庫

あとみっく文庫／PDF立ち読み版

目次

序/ 6

封の一 / 15
淫ノ根
インノネ

封の二 / 65
淫水蝶
インスイチョウ

封の三 / 119
淫夢人形
インムニンギョウ

封の四 / 173
淫吸バス
インキュバス

封の五 / 212
淫校祭
サバト

呪詛喰らい師
カースイーター

"CURSE EATER"
Written by Aoi Muramasa
Illustrated by Alto Seneka

思っていたよりも力強い男子の腕の中で、抵抗もできず呻く退魔少女の乳房が、ゆっくりと揉みこねられた。たわわな果肉を歪ませて、少年の指先が、深く、強く突き立てられる。

「はぁう……んんんっ！」

感度を増した乳肌に食い込んでくる、固く力強い男の指の感触に喘ぎが漏れる。

（これが、男の指なのか。有佳の優しくて遠慮がちな揉み方とは全然違う、肉の奥まで、指先が届いてくるっ！）

信司の指使いは、普段の彼女であったなら、快感を感じるにはほど遠い稚拙で荒っぽいものであったが、媚薬鱗粉で欲情させられた身体には、深く強烈な刺激となって、しなやかな裸身をわななかせてしまう。

「常磐城さん……ごっ、ゴメンっ！　オレ……こんなことしたくないのに、身体が……勝手に……ッ！　あぁぁ、指が動いて……んんっ！」

わずかに理性が残っているのか、口では詫びながらも、信司の指は一時も休まず蠢いて、柔らかさと弾力を併せ持った、ボリュームたっぷりの肉果を揉みこねている。

「うっ……くうんっ、謝られても迷惑なだけだ。だっ、黙っていろ！　ひぅ……んくうっ」

ぎこちない指使いでこね回された乳房の奥から沸き起こる快感の波に呻いてしまいながらも、抵抗を許されぬ神伽の巫女は、勝ち気な口調で少年に命じる。

「男の子よ、黙らずともよい。そなたの淫らな思いを口にせよ」

相反する指示を下す淫水蝶。
この状況では、どちらの命令に優先権があるのかは明らかであった。
「柔らかい……女の子のオッパイって、こんなに気持ちいい感触なんだ……」
スケベ男の思考垂れ流しで、信司は恥ずかしいセリフを口走りながら、汗ばんだ乳球に指先をめり込ませ、乳肉のボリュームを確認するかのように、下からすくい上げてこね回す。革帯で乳首のみを隠された豊乳が、むにゅり、むにゅりと揺れたわみ、深々と指を食い込まされて歪に変形させられた。
荒っぽく扱われた乳肉は、熱く火照るような悦波に包まれてさらに張りを増し、しっとりと汗ばんで、少女に切れ切れの色っぽい呻きを上げさせる。
「んっ、くぅ……うっ、つぁ……もっと、優しく揉まないかッ！」
明らかに愛撫慣れしていない強さで繊細な乳肌を責められた咲妃は、小声で信司を叱りつけるが、操られた少年の指はさらに強く、欲望剥き出しで豊乳に食い込んでくる。
「ああ、指が吸い込まれて、押し返されて、オッパイって、すごい！」
童貞少年丸出しの感想を、荒い鼻息混じりに告げながら、信司は乳揉みを続けた。
「んぁ、はぁぁっ、いっ、言うな、黙ってろ……」
無駄とはわかっていても、命令せずにはいられない。
信司の筋肉質な前腕部に密着している腋の下から、甘い匂いのする熱い汗が噴き出し、乳揉みの激しい動きでこね回されて、クチュクチュと艶めかしい音を立てている。

「お主の汗、よい匂いがする。我の好みし香りじゃ」
蝶の羽を持った淫神は、夜風に乗って漂う咲妃の匂いにうっとりと目を細める。
「はぁはぁはぁ……んんっ！　我が身体より出る匂いは、御前様のような神々を癒やし奉ります。なにとぞ、なにとぞ私に伽を……伽をさせてくださいませ」
男の欲望剥き出しの荒々しく執拗な乳揉みの快感に喘ぎながら、神伽の技巧を身につけた少女は、恭しげな口調を崩さずに告げる。
「我に伽など無用。欲するのは我が子に飲ませる乳汁のみ。男の子よ、その娘の乳帯を外せ、乳先も弄るのじゃ」
伽の申し出をすげなく断った淫水蝶は、信司に新たな指示を下す。
「う……乳首ッ！　ゴクンッ……」
生唾を呑み込む大きな音を立てた少年は、興奮に震える指を革帯に引っかけて、一気にズリ下げた。
既に勃起を際立たせていた乳首が、ぷりゅんっ！　と弾みながらあらわになる。
焼き立てのパンケーキのようにふっくらと盛り上がった乳輪の中央、汗に濡れて艶めかしい薄紅色に照り輝く乳頭が、ミサイルの信管のように尖り勃っていた。
「くはぁ……んんっ！」
剥き出しにされた敏感な突起を、夜風と少年の視線に舐められて、神伽の巫女は悩ましげな呻きを上げてしまう。

「あ……あぁ、これが、常磐城さんの乳首……すごく綺麗で、エロいよっ！」
子供っぽい賛辞の声を上げた少年の指が、乳房の曲面を這い上がってきた。
「く……触るのは仕方ないが、優しくだぞ……そこは、すごく敏感……ッ！」
言い終わる前に、勃起乳頭をキュッ、ときつく摘まれた。
「くひぃぃ……んんっ！　つっ、強イッ……あぅぅッ！　加減しろ、バカッ！」
親指と中指に挟み込まれて、押し潰されそうに圧迫された左右の乳首を心配げに見下ろしながら、少女は声を震わせて少年を罵る。
「ああ、乳首、コリコリしてる。常磐城さんの身体、すごくいい匂いがする……」
少女の声など聞こえぬ様子で、夢見るような声を上げた少年は、咲妃のうなじから立ちのぼる甘い媚香を嗅ぎながら、剥き出しになった乳首をなおも弄り回す。
「んひっ！　こっ、こらっ！　少しは力の加減をしろ！　そっ、そんなに強く摘むんじゃないっ！　うぁ、ヒッ！　引っ張るなっ！」
きつく摘まれた乳先を左右に揉み転がされ、引っ張られながら捩り上げられた退魔少女は、胸の芯を痛悦感に貫かれ、色っぽい声を上げて裸身をくねらせる。
薄紅色に充血していた勃起乳首は、強く圧迫されすぎて血の気を失い、透明感のある淡いピンク色になって苦悦に打ち震えている。
「乳首のコリコリ感が病み付きになって、止まらない！　ずっと弄っていたいよ！」
男の本能を剥き出しにされた少年は、駄々っ子のような口調で言いながら、心地よい触

り心地の乳首を摘んだ指を蠢かせ続ける。
「初々しいのう。……そろそろ乳の内側も可愛がってやろう。男の子よ、乳先から指を離して、もそっと優しゅう揉んでやれ」
「うっ？　うぅぅ……は……はい……」
妖女の命令には逆らえず、未練がましく指を離した信司は、汗に濡れ、張りを増して火照り疼く乳肌を、ソフトタッチで揉みこねる。
若々しい弾力を誇示してお椀型に突き出した豊乳は、根本から大きな円を描くようにこね回され、先端に向かってやわやわと扱き上げられた。
「んぁ……そっ、そういう揉み方ができるなら、最初からやれ！　はぁはぁはぁ……」
張り詰め汗ばんだ乳房を優しくこねられる心地よさに目を細め、表情をやわらげて喘ぐ咲妃の前に、宙を滑るような動きで淫女神が迫ってきた。
「よう実った乳よのう。これならば、乳汁もよう出るであろう」
ぎこちないながらも執拗な愛撫で張りを増し、見事に突き出した豊乳をじっくりと検分しつつ、乳汁を糧とする淫神は妖艶な笑みを浮かべて指を差し伸べてくる。
「我が子等に吸わせるに、ちょうどよい大きさ、形の乳先じゃ」
そっと摘まれた乳首から発した快感は、信司の粗雑な愛撫など比べものにならぬほど強烈なものだった。
「はぁう……うくうぅぅんっ！」

冷たい指で吟味するかのように弄り回された勃起乳頭は、ジンジンと甘く疼きながらさらに感度を増し、呼吸さえままならないほどの悦波が発生し、少女の裸身を強張らせる。
「おっ、お待ちを……私、乳汁は出せませぬ。ゆえに、なにとぞ、伽を……ッ！　御前様の神体に伽をさせてくださいませ」
少年に乳房を揉みこねられ、妖女に乳首を摘み責められる快感に声を震わせながら、神伽の巫女は奉仕を申し出る。
「我が欲すのは、そなたの伽ではない。我が舌で乳房の中を掻き混ぜて、すぐに乳汁が出るようにしてしんぜよう」
咲妃の願いも聞き入れず、一方的に告げた淫神は、色っぽい唇の間から、赤い舌先をヌルリと突き出した。それは、みるみるうちに長く伸び、獲物に忍び寄る蛇のようにくねりながら、咲妃の乳首に絡みついてくる。
「ひぁ！　くううううんっ！」
熱く煮え立つかのような、超絶快感に勃起乳首を包み込まれた少女は、信司の腕の中で革帯緊縛された極上の裸身を仰け反らせてしまう。
妖女の舌は、右乳首に幾重にも巻きつき、左の乳首にも先端を伸ばして密着させた。
「若く初々しい味がする。このように美味な乳肌は初めてじゃ」
口から長々と舌を突き出したまま、淫水蝶は淫らな笑みを浮かべて告げると、乳首に絡めた舌先を蠢かせる。

くちゅ、ちゅぷ、ぬちゅ、ぷちゅ……水飴のように濃い唾液を塗り込む淫音を立てながら、赤く色付いた勃起乳頭が、左右同時に舐めしゃぶられた。
「くぁ！　はぁぁぁぁ……ッ！」
壮絶な快感に乳先を貫かれた少女の裸身が、電流でも流されているかのようにビクビクと痙攣する。
「すごい……すごいよ常磐城さん、痙攣しちゃうぐらい気持ちいいんだね？」
腕の中で悶え狂うしなやかな裸身をしっかりと抱き止めながら、操られた少年は、汗ばんだ豊乳を優しく、深い指使いで揉み続けている。
「さて、奥の味はいかがであろうか……」
乳首の味を堪能した淫神の舌に、異様な変化が起きた。舌のざらつきを形成する小突起、味蕾（みらい）が、ゾワゾワと伸び、乳首の先端を小刻みに突き始める。
つぷっ、つぷっ、つぷぷっ！　コチコチに充血した勃起乳頭の先端で、まだ未開の乳腺口を探り当てた味蕾触手は、乳首の内側に侵入してきた。
「ふぁ、中に……奥にっ！　あはぁぁ……ンッ！」
妖女の舌に乳首のヴァージンを奪われた咲妃は、勃起した乳先を内側からくすぐられているような異様な感触に裸身を仰け反らせる。
しなやかな肢体にドッ！　と汗粒が噴き出し、半開きになって喘ぐ唇の端から、喜悦の涎が溢れ出して、紅潮した頬から顎のラインを伝って喉元まで滴り落ちた。

「ああ、常磐城さん、すごく気持ちよさそうな顔しているよ。涎まで垂らしながら喘いで、堪らなくセクシーだぁ……んふぅ、すごくいい匂い……あむ、ちゅぱ……」
超絶快感に震える肩越しに、うっとりとした声で囁きかけた信司は、辛抱堪らなくなったのか、白い喉元や、肩口に唇や舌を這わせ始めた。
「ふぁ、しっ、信司ッ！　おまえは……なっ、舐めるなッ！　あっ、はぁぁうんっ！」
乳腺を掘り返される快感に、さらに追い打ちを掛けられ、神伽の巫女は甘く裏返った声を上げて身悶える。
「はぁぁ、美味しい。すごくスベスベで、甘くて……たまんないよ。ぴちゃ、ちゅぱ、ぴちゅるっ、れろっ、れるっ、はぁぁ、女の子の涎って、こんなに美味しいんだ……」
操られた少年は、咲妃の声など完全無視で、夢中になって舌を這わせ、喉を伝い流れる喜悦の涎や、甘い媚香を放つ汗を根こそぎぬぐい去ってゆく。
（これが男の舌か？　何と激しくて、貪欲で、力強い……。まるで、飢えた獣に貪られているみたいだ）
熱くざらついた男の舌が、きめ細かな肌を何度も舐め上げる感触が、乳房の内部を探られる快感と入り交じって、呪詛祓い師の少女を惑乱させる。
「おお、乳の中も熱く、甘く潤んでおるわ。心地よかろう？　もうすぐじゃ、もうすぐ乳汁が湧き出てくる」
乳首の内部にまで味蕾触手を侵入させ、繊細な粘膜組織の味を堪能した淫神は、満足げ

な口調で言いながら、なおも淫らに舌をくねらせる。
「くうぅぅ、そんな奥にまで……はぁぁぅ、んっ、あ、あぁぁぁ……」
乳管内に侵入した極細の味覚器官は、乳房の奥へ、奥へと潜り込み、ついには母乳を分泌する器官である乳腺葉にまで到達する。
「ゆくぞえ、何度気をやろうと、乳汁を湧き出させるまで容赦はせぬ」
乳辱に喘ぐ咲妃の体内で、淫水蝶の舌が細かく震え始めた。
ヴヴヴヴヴぅぅぅぅ〜ンッ！　蜂の羽音のようなくぐもった振動が、乳房を内部から震わせ、母乳分泌系の柔組織を根こそぎ揺すり立てる。
同時に、熱気のような淫神のオーラが乳房内部に注ぎ込まれ、未稼働であった母乳分泌器官を強引に活性化させた。
「んぁぁぁ！　くぅぅっ！　ウッ、アッ、んくうううううううンッ！」
汗に濡れ光る裸身を強張らせ、乳房の奥底から押し寄せる超絶快感に耐える咲妃。
「常磐城さんのオッパイ、震えているよ……ああ、すごい、こんなに張り詰めて……」
陶酔状態の信司は、振動に包まれた乳肉を夢中になって揉み立てた。外からは力強い指使いで豊乳をこね回され、内からは、神の舌で乳腺を刺激される。
（ダメ……だ、強烈すぎて……何も考えられない。胸が……燃えて、弾けそうだッ！）
「我を鎮めると欲するなら、乳を出せ！　早う！　出せ！　出さぬか！」
鬼気迫る声で言いながら、母乳を欲する淫女神は、さらに激しく乳腺を犯す。

とてつもない快感の大波が、胸の奥から沸き起こり、乳房の芯を駆け上がってきた。
「うぁ、あぁぁ、はあぁぁぁぁぁぁぁぁ〜ンッ!!」
艶めかしい声で夜気を震わせながら、女悦の極みに追い上げられて仰け反った咲妃の乳先から、プシッ！　プチュルッ！　と純白の乳汁がしぶき出る。
「おおお、出た！　出たぞ……」
歓喜の声を上げる淫水蝶の顔にまで、白い飛沫を飛ばしながら、神伽の巫女は人生初の射乳絶頂に痙攣する。
「常磐城さん、ミルク出してる……美味しそうだ……飲みたい……」
飢えた子犬のように舌を突き出して喘ぎながら、信司は、熱い湿り気を孕んで、ムワッ、と甘く立ちのぼる母乳の匂いを胸いっぱいに吸い込んでいる。
「はぁはぁはぁはぁ……あぁ、出てる……母乳が……んくぅぅ……ッ」
乳腺に挿入された味蕾触手が抽送されるたびに、乳首の先端から迸る乳汁を呆然と見ながら、少女は気が遠くなりそうな射乳快感に身をわななかせていた。
「乳の用意は調(ととの)った。さあ、我が子等よ、出ませい！」
咲妃の乳首から舌を引き抜いた淫水蝶は、上体をグイッ！　と仰け反らせる。
大きく突き出された豊乳の頂点で、丸く膨らんでいた左右の乳首がさらに膨張し、先端がクパァ、と大きく開口した。直径一センチはありそうな、肉色の粘膜トンネルを巨乳の先端に開かせた妖女は、乳房の基部をきつく握り締め、思い切り扱き上げる。

「な、何だ？」
乳汁を滴らせる乳首の疼きも一瞬忘れ、呆然とつぶやく咲妃の眼前で、淫水蝶の巨乳内部から、何かが這い出してきた。
「オアァァァーッ、オアァァァァァーッ！」
妖しさと物悲しさを感じさせる赤ん坊の泣き声が、妖女の乳先に開いた穴の奥から聞こえてくる。粘膜トンネルがさらに大きく広がり、その奥から、透明な粘液に濡れた赤ん坊の頭部が、ヌプッ！　と顔を覗かせた。
蝶の羽を持った美妖女の巨乳から顔だけを突き出した、握り拳ほどのサイズの赤ん坊は、歯のない口を大きく開けて、母乳をせがむ泣き声を上げ続けている。
「愛しき子らよ、巫女の乳を存分に吸い、飢えと渇きを癒やすがよい！」
異形の赤子等に慈愛に満ちた声を掛けた淫神は、グイッ、と身体を寄せてきた。
淫女神の妖乳と、咲妃の美豊乳が、互いをひしゃげさせながら密着し、乳先で泣く赤子の口が、母乳滴らせる少女の乳頭をパクリと咥え込む。
ちゅううっ！　ずちゅるるるるる～ッ!!
左右の乳首が強烈に吸い上げられ、分泌が始まったばかりの母乳を吸飲された。
「ひはぁぁんっ！　やっ、あっ、吸われて……出るうッ！　はぁぁぁぁぁぁンッ！」
母乳と一緒に魂さえも吸い取られているかのような超絶快感に襲われ、神伽の巫女は前後から抱擁された裸身を痙攣させる。

左右の手が掴まれ、学生服の股間へと引き寄せられた。
最後の一人は、何やら迷っていたが、やがて、咲妃の背後に回り、下着を張り詰めさせてまろやかに張り出した美尻に、股間の膨らみを押しつけてきた。
「うっ、動くぞ……こんな感じで、いいのか？」
前後を男の股間に挟まれ、両手をズボンの膨らみに添えた神伽の巫女は、少年達への奉仕を開始した。布越しに、生固い感触を伝えてくる勃起に繊細な指で手淫奉仕を仕掛け、量感のある尻を揺らして、股間と尻で男のモノに快感を送り込む。
「もっと、もっと擦って……くぁ、そっ、そうだ……あぁぁ、気持ちいいっ！」
要求されるまま、強張った海綿体を布越しに握って上下に扱き上げると、若い勃起はビクビクッ！　と敏感な快感反応を伝えてくる。もう一人の少年の勃起にも、同様の手淫愛撫を仕掛けながら、充血して弾力を増した恥丘で、ズボンの前を突き破りそうに強張った牡器官を擦り上げて、疑似性交の快感を送り込む。
（信司……見るな……！　おまえには、見て欲しくない）
奉仕を続けながら、思わずにはいられない。樹の根触手に嬲られているときは、受け身の立場だったが、今は積極的な奉仕行為。先ほど以上に胸の奥がざわめき、得体の知れない罪悪感が込み上げてきて、勃起を擦る指の動きもぎこちなくなってしまう。
「もっと、もっと動いて、擦ってくれ！」
素股奉仕を受けていた少年がねだりながら腰をせり上げてくる。

「ひぁぁう……ンッ！　こう、かな？　どうだ？　ふぁ……んっんっんっ」
恥じらいの表情を浮かべつつ、神伽の巫女は腰をくねらせ、繊細な指で布越しに勃起を愛撫した。圧迫、摩擦された性器の奥から溢れ出た愛液が、秘部を護る革帯を透過してショーツの股布をグッショリと濡らし、少年のズボンにまで染み通って、甘酸っぱい淫臭をバスの車内に漂わせる。
小さな喘ぎを漏らしながら、少年達に奉仕する少女の全身から、甘く香しい発情臭がフワリと立ちのぼり、異様な姿に変貌したバスの車内を媚香で満たした。
（くううっ！　ここまで痴態をさらしてしまったら、もう、ヤケだ！　信司のことはひとまず忘れて、本気を出させてもらうぞ！）
ようやく開き直った神伽の巫女は、習得した奉仕の技巧を駆使して反撃を開始した。
股間にあてがわれた左右の手指は、ズボンの前をはち切れさせんばかりに盛り上がった勃起の輪郭に沿って指を滑らせ、敏感な亀頭冠や先端部を布越しに刺激する。
「おふぅっ！　そっ、それ……すごい……っ！」
鉤型に曲げた指先で、亀頭のワレメを刺激しつつ竿部分を扱き上げてやると、少年の身体は全身がペニスになったかのように強張り、仰け反った。
（全員を果てさせて、木霊の出方を見る！）
両手を駆使して、二本のペニスを責め立てながら、神伽の巫女は腰使いを速める。
ショーツの股布に浮き出た秘裂に沿って勃起が滑る前後運動が、尻に押しつけられたも

う一本の男根も擦り上げ、圧迫して、女を知らぬまま死霊となった少年達を昂ぶりの頂点へと誘ってゆく。

「あ、あぁぁ……出るッ！」

「僕も……我慢、できない！」

巧みな愛撫で快感の極みに達した四本のペニスは、相次いで絶頂を迎えた。

恥丘に擦り上げられていた少年と、手淫奉仕されていた二本の勃起が、ズボンの下で制御不能の脈動を始め、少し遅れて、尻を貪っていた肉柱もドクドクと脈打つ。

（果てたか……だが、何か妙だ）

ビクビクとしゃくり上げる勃起をなおも扱き上げて快感を送り込みながら、咲妃は違和感を覚えている。射精の脈動は確かに起きているというのに、ズボンの股間に滲み出てくるはずの精液の染みは見当たらない。

「まさか……？」

神伽の巫女は、射精快感に硬直している少年のベルトを緩め、ジッパーを引き下げて、股間を剥き出しにさせた。

「これは……射精封じ⁉」

下腹にめり込みそうなほどにいきり勃った少年の勃起根本には、樹の根触手が幾重にも巻きつき、陰茎海綿体と尿道をきつく締め上げて、精液の放出を阻んでいる。

仮性包茎気味のペニスは、下腹を打ちながら力強い脈動を起こしているが、亀頭先端の

ワレメからは、一滴の精液も迸り出てこない。
生きた人間なら、たちまちのうちに鬱血を起こし、ペニスが壊死してしまうような緊縛を施された少年の霊体は、萎えることのない勃起を強要され、絶頂を迎えても射精できぬもどかしさに延々と責められ続けているのだ。
(少女達と愛しあうまでは禁欲しようという少年達の想いを、木霊が曲解した故の呪縛か？　だが、これでは増大した性欲がループして、事態を悪化させるだけだ)
痛々しく緊縛された男根を憐れみの視線で見つめながら、神伽の巫女は思う。
淫神は、少年達が放つ陽の気を、このバスの姿を維持するための糧とし、その姿故に到着する場所のない無限の徘徊を続けて、さらなる陽の気を欲しているのだ。
それはまさに、終わりのない呪縛であった。
(私がイキそうになったとき、触手が逃げていった理由もこれで察しが付く。女が絶頂するときに放つ陰の気が、木霊のお気に召さなかったわけだな)
「ううう、ぐうううう、んっんっ、あぁぁぁ……」
喜悦と言うよりは、苦悶に近い声を上げながら、少年達は射精封じされた勃起を脈動させ、淫らな欲望で歪んだ陽の気を発生させ続けている。
(陽の気に霊力を乗せて送り込めば、木霊の神体に接触できそうだが……どうする？　一つ、手がないわけでもないが、あまりにも危険な賭けだな……)
彼女が股間に封じた淫ノ根の力を解放し、男性器を具現化させれば、彼女にも陽の気を

放つことができるが、快感に呑まれれば、神伽の儀式は失敗してしまう。
方法を模索していた咲妃は、背後で金縛りになっている少年のことを思い出した。
「信司、おまえの助けが必要だ！」
身動きできぬ少年に向き直った咲妃は、真摯な口調で話しかける。
「まず、そのために金縛りを解いてやる……木霊よ、許可してくれるな？」
天井の巨眼を仰ぎ見て問いかけると、扇風機が変じた単眼は、何の反応もしなかったが、少女の手足に絡んでいた樹の根触手がスルリと解かれた。木霊もまた、この永劫に続く彷徨から解放されたいと願っているのだ。
「了承、かたじけない。……解呪、開始！」
古風な口調で告げた呪詛喰らい師（カルスイータ）は、床に脱ぎ捨ててあったブルゾンのポケットから赤ペンを取り出し、信司の額に手早く呪印を描き込んだ。
「く……動けるぞッ！　おまえを辱めた死霊どもと、あの目玉野郎をぶっ飛ばすんだな？　手を貸すぞ！」
金縛りが解けるやいなや、信司は拳を握り締めて立ち上がろうとする。
「違うッ！　しゃ……射精してくれ」
「はぁ!?」
珍しく口ごもりながら告げられた卑猥な言葉に、信司は声を裏返らせる。
「射精だ、射精ッ！　何度も言わせるな！　おまえの肉体を仮の依り代として、彼らの霊

を憑依させ、射精と同時に文字どおり昇天させる。そうすれば、この幽霊バスを形作っている少年達の想いの呪詛から、木霊を切り離すことができるんだ！」

「おっ、おい、ちょっと待てよ、そいつらをオレに憑依させるつもりなのか⁉」

目の前で陵辱行為をした少年達の霊を憎々しげに睨みつけながら、信司は声を尖らせる。

「そのとおりだ。時間が惜しい、始めるぞ！」

立ち上がった咲妃は、少年達の身体を次々に抱擁し、口づけを仕掛けた。

エクトプラズム化した霊体はまるで煙のように揺らぎながら、少女の口腔内に吸い込まれてゆく。四人目を吸い込み終えるまで、一分とかからなかった。

「さて、今度はおまえの番だ。この呪詛祓いの成否は、おまえに掛かっている」

信司に向き直った咲妃は、彼の肩に手を置き、困惑気味の顔を真正面から見つめる。神伽の巫女の美貌には、今まで誰にも見せたことのない、恥じらいと照れのような表情が浮かんでいた。

「ちょっと待て！　心の準備が……んむうっ⁉　んんんん～ッ⁉」

有無を言わせず唇を奪った神伽の巫女は、胃の腑に宿していた少年達の霊体を、信司の体内に一気に吹き込んだ。温かく柔らかな唇の感触に陶酔する間も与えられず、少年の口腔内に冷たい煙のようなものが流れ込み、胃の腑へと下り落ちてゆく。

「んぐ……はぁはぁはぁ……な、身体が冷たい……手足が、動かないぞ！」

四人分の死霊を無理やり憑依させられた少年は、美少女とのファーストキスで紅潮した

顔を歪め、不安げな声を上げる。
「心配せずに身を任せてくれ。さっ、さあ、射精させてやるぞっ！」
「そっ、そんなこといきなり言われても……うぁ、あぁぁ……っ！」
困惑の声を上げる少年のズボンと下着を慌ただしくズリ下げた咲妃は、まだ萎えたままの勃起に指を絡めて愛撫を仕掛ける。
「目を閉じていろ、何も話すな！　ただ快感に身を委ねてくれればいいんだ！」
叱りつけるような口調で言いながら、頼りない感触の肉茎を握って上下させる。
「く……うぅぅっ、こんなのは……あ、うくうぅ……ダメ、ダメだよ……」
冷たく滑らかな指でペニスを撫でられた少年は、言われたとおりに目を閉じながら、上ずった声を上げた。
「しゃべるなって言っただろう！　黙って任せてくれ、頼むから！」
色白な美貌を紅潮させた少女は、信司のペニスから視線を逸らしながらも、陰嚢を優しくすくい上げて揉み上げ、もう片方の手で肉茎を掴んで扱き上げる。
しかし、神伽の技巧を身につけた彼女の愛撫を受けても、ペニスはなかなか勃起しようとしなかった。
「おかしい、なぜ勃たない？　男ならこういう状況を喜ぶんじゃないのか？」
「無茶言うなよ！　身体がゾクゾクして、手足が痺れて……そっ、それに、こんな状況でキミに恥ずかしいことさせたくないんだ」

「射精しろと命じたのは私の方だ！　ええいっ！　こういうときは欲望に身を委ねるんだ、つまらぬ意地など張っていないで、さっさと射精してしまえ！」
一向に勃起しない男根に苛ついた咲妃は亀頭にまで愛撫を仕掛けるが、少年は眉を寄せて呻くばかりで、海綿体の充血はなかなか進まない。
「手でしてもらうだけでは不満なのか？　何をして欲しい？　胸の間に挟むのか？　そっ、それとも、口でしないとダメなのか？　言え！」
半勃起状態から進展しない陰茎に、繊細な指で技巧の限りを尽くして愛撫し続けながら、神伽の巫女は焦れた声を上げる。
「ダメだ……こんなこと、やっぱり、オレ、できないよっ！　他の方法を……ッ」
「ふっ、ふざけるなっ！　踏み潰されたくなかったら、さっさと射精しないかっ！」
業を煮やして立ち上がった咲妃は、急性インポに陥っている少年の股間をグリッ！　と足裏で踏みつけて勃起を強要する。
「うぐ……あぁぁうッ！　きっ、きついっ！」
苦しげな声を上げた信司のペニスが、足の下でグングンと力をみなぎらせ始めた。
「なっ、何ッ⁉　そっ、そうか、そういう性癖なら、私もとことん付き合ってやるぞ。ええいっ！　もう、どうにでもなれッ！」
自棄気味の声を上げた咲妃は、靴と靴下を手早く脱ぐと、しなやかな美脚を少年の股間へと伸ばし、さっきとは桁違いに固く大きくなった肉茎を素足で踏みつけた。

「こうやって踏まれるのがお望みだったんだな？　なるほど、言えないわけだ」
足裏に伝わってくる勃起の硬さと熱さに妙な昂ぶりを覚えてしまいながら、女王様モードに切り替えた咲妃は足コキ責めを仕掛ける。
きゅむっ、しゅるっ、ぎちゅっ、ぐりっ……少年の下腹に亀頭を擦りつけながら、冷たく滑らかな足裏がマゾ属性の肉棒を圧迫し、擦り上げた。
「ちっ、ちがうっ！　オレは……あっ、あぁぁっ！」
否定の声を上げる信司だが、少女の滑らかな足裏と、少年自身の引き締まった下腹に挟まれて踏み転がされた勃起は、さらに充血を強め、ドクッ、ドクッ、と力強く脈動する。
（これが……生身の男のペニス……信司の……くううっ！）
言い様のない恥ずかしさと興奮に襲われた咲妃の身体がブルブルッ、と震え、新たに分泌された愛液が股間を熱く湿らせる。
「かっ、感じているのか？　だらしない顔になっているぞ。ほおら、ここをこうやって……こうすると……もうグチャグチャじゃないか、はっ、恥ずかしい奴めっ！」
自分が濡れてしまったことを棚に上げた神伽の巫女は、カウパーを滲ませ始めた亀頭を、足指で器用に挟み込んで揉み責めつつ、言葉でも背徳的な快感を煽る。
「んんっ、ううっ！　あ、あぁぁ、ダメだぁ……出ちまウッ、ゴメンっ、出るうううっ」
巧みに動く足指の下で、先汁でヌルヌルになった亀頭と肉茎がひときわ固く張り詰め、切羽詰まった脈動を始めた。

「いっ、いいぞ……出せ……さあ、しゃ、射精しろっ！」
今まで感じたことのない妖しい昂ぶりに全身を火照らせた神伽の巫女は足裏全体を使って勃起を圧迫しつつ擦り立てる。
「あっ、あぁぁぁぁぁ、出るうううううううっ!!」
射精を告げる信司の声に、歓喜に満ちた四少年の声が重なった次の瞬間、勃起が灼熱の絶頂汁を噴き上げた。
びゅるうっ、びちゃぁ、どぷっ、どぷっ、ぶちゅるるるっ、びゅうっ、びしゃっ、びしゃっ、びしゃっ、ぶちゅるるるる～ッ!!
霊体と化した少年達とは桁違いに濃厚で滋養に富んだ陽の気を、木霊は網状に広げた樹の根触手で受け止め、残らず吸い上げてゆく。
「いっ、今だッ！　霊体波動同調ッ……潜入ッ！」
絶頂の際に発生した射精快感に同調し、陽の気に自らの意識を乗せた咲妃は、淫神の核である木霊の意識に侵入した。
（くう、これが信司の……精液の温度、味、感触……そして快感。妙な気分だ。私にこんな恥ずかしいことまでさせて、あぁ、射精とはこんなに気持ちいいものなのか）
信司の感覚とシンクロし、絶頂感に意識を融合させた咲妃は、精液に含まれる様々な情報を体感しながら、木霊の神体めがけて突き進み、接触に成功した。
それは、意識と呼ぶにはあまりにも異質で、あまりにも大量の情報集積体であった。

一粒の種から芽吹いた樹が、年を経て木霊を宿すまでの膨大な情報が、咲妃の意識に一気に流れ込んでくる。

ようやく、木霊が淫神となるきっかけとなった事故の情報に行き当たった。

陽光を浴びていた木霊の身体に、激しい衝撃が走る。同時に伝わってくるのは、事故に遭った瞬間の少年達の感覚と記憶。事故の痛みと衝撃、そして強烈な悪寒が全身を包み込み、息絶えるまでの感覚を、神伽の巫女は四人全員の分、体験させられた。死の衝撃を疑似体験した肉体が弓なりに仰け反り、激しく痙攣する。

（まだだ！　もう少し……もう少しで、因果の根に触れられる……触れたッ！）

バスに激突されてへし折れてゆく古木の生への欲求と、少年達の生きたいという想いがシンクロし、本来交わらぬはずの魂が、バスの形となって融合する。

「互いの存在を歪めて絡みあった呪詛の糸、私が全て解いてやる！」

自らの意識を一振りの刃に変えた呪詛喰らい師（カーズイーター）は、少年達の魂ともつれあった呪縛を一気に断ち切った。

「くはあァ！　はぁ、はぁはぁはぁはぁ……」

深いトランス状態から目覚めた神伽の巫女は、溺れる寸前で水面に顔を出した水難者のような激しさで、荒い呼吸を繰り返した。

全身が冷たい汗に濡れ、手足の指先が冷えきっていて感覚がない。

「常磐城さんっ！　だっ、大丈夫か！　息をしろ、オレがわかるか？」

「グモォォウッ！　チンポ汁ヲブッカケテヤルゾォ！」
牛馬そのもののような絶頂の声を上げた二人の獣人は、咲妃の肩をガッチリと掴んで逃亡を封じると、大根サイズの巨根をしゃくり上げて射精を開始した。
びゅううう、びゅるるる～ッ！　びしゃぁ、びしゃぁ、びしゃびしゃびちゃぁ！
獣臭さを凝縮した悪臭を放つスペルマ奔流が、咲妃の顔面にぶちまけられた。
「んんっ！　くううう！　うっ、くふぅ、なんて量だ……んむうぅぅッ！」
灼熱の白濁流で美貌を汚されて呻く神伽の巫女の顔と身体は、たちまちのうちに粘度の高い精液に濡れまみれる。獣臭を放つ牡汁は、革帯の退魔装束のみをまとってひざまずいた極上肢体にべっとりと粘り着き、メリハリの利いたボディラインを舐めるようにしてドロドロと流れ落ちてゆく。
ピシイインッ！　パァァァンッ！
全身を歓喜に震わせながら射精を終えた牛頭と馬頭の身体が、風船の割れるような音を立てて爆ぜ、依り代にされていた着ぐるみ姿に戻って床に転がった。
ジャージを改造した着ぐるみ姿で昏倒した男子生徒の股間では、露出したままのペニスが、本来のサイズに戻って精液の残滓を滴らせていた。
「まずは……二匹……うぷっ！」
全身から立ちのぼる濃厚な精液臭に顔をしかめる咲妃の鼻先に、薄汚れた包帯でグルグル巻きにされた肉柱が突きつけられる。乾いたナマコのような乾燥男根は、太さはさほど

ないが、長さは三十センチ近くあり、見るからに不潔そうだ。
「ウアァァァ、チンポヲ咥エロォ！」
「こんなボロ雑巾みたいなのを!?　断るッ！　んぐううっ!?　ゴホッ、ゴホッ！」
包帯を巻かれたミイラ男の肉棒が唇に押しつけられ、有無を言わせず喉奥にまで突き挿れられた。カビ臭さと、乾いた腐臭の入り交じった匂いが鼻腔を突き抜け、精液にまみれてもなお凛々しさを失わぬ美貌を汚辱に歪ませる。
「アァァァ、濡レテ、温カデ、気持チイイ口マ〇コダァ」
「ぐふっ、んぐぅ……んっ、ぐぅぅ……ごほぉッ！」
一気に食道入り口まで蹂躙されて、激しく咳き込み苦悶する少女にはお構いなく、ミイラは欲望に突き動かされるがままに、温かく潤んだ口腔を犯し抜く。
ぐぷっ、ぐぷっ、くちゅ、ずちゅ、ぐちゅっ……フルストロークの抜き挿しのたびに、肉柱に巻きつけられた目の粗い包帯が、喉粘膜をゾリゾリと擦り、食道入り口にスッポリとはまり込んだ亀頭が、強烈な嘔吐感を沸き起こらせる。白く細い咲妃の喉には、食道を蹂躙しながら抽送される怪ペニスの姿が、くっきりと浮き出ていた。
「んぐぅぅ！　ゴホッ、グッ、んふぅぅぅ、ゴホォ、ぐぅぅぅぅ、んんっ！」
グチュグチュと恥ずかしい音を立てて犯される唇の狭間から、泡立てられた唾液がこぼれ出し、喉を伝って豊乳の曲面まで垂れ落ちてゆく。
（ぐぅ！　なっ、何だ？　イチモツが、大きくなっている……喉が裂けるっ！）

清浄な芳香を立ちのぼらせる巫女の唾液を吸い込んだ乾燥ペニスは、喉粘膜をギチギチと押し広げながら体積を増し、ボンデージ緊縛された極上裸身を窒息感で痙攣させる。

「キシシシッ！　オマエノ涎デ、オレノチンポガ甦ッタゾ！」

ジュポッ、と音を立てて咲妃の口から勃起を引き抜いたミイラ男は、水分を吸収して生々しく復活したイチモツを見せつけた。激しいイラマチオで包帯が解けて露出した男根は、ゾンビ達のそれよりもおぞましい黒色をしており、先端のワレメから、茶色っぽく濁った先汁を滴らせる腐肉棒だ。

「うくぅ……そんなモノが、私の口に……んっ！　んぐうぅぅぅぅ！」

嫌悪に顔を歪める少女の口に、醜悪な肉凶器が再び突き込まれ、さらに激しく喉を犯す。

「ガフウウウッ！　オレモ犯スッ！　メチャメチャニ犯シテヤルゾ雌豚メェ！」

イラマチオに苦悶する咲妃の姿に興奮した狼男は、精液に濡れまみれた身体を背後から抱き締め、股間に毛むくじゃらの怒張を押しつけて腰を振る。革帯緊縛された豊乳が、突き上げの衝撃で残像を描いて揺れ弾むほどのハードな素股責めだ。

「んぐうううっ！　んおぉぉぉっ、んむうううううんっ！」

性欲に狂った獣人は、呻く少女の裸身を獣のパワーで揺さぶりながら、ブラシのような獣根を激しく擦りつけてくる。圧迫された恥骨が軋み、膣口を護る唯一の防壁である薄革ボンデージが、剛毛ペニスに押されて、秘裂に深々と食い込んだ。

（退魔装束が……食い込んで……恥骨が砕けてしまいそうだッ！）

女性の身体のことなどまったく気遣っていないかのような凶暴な責めに、退魔業のために鍛えられた白い裸身が軋み、快感と呼ぶにはほど遠い衝撃が、擦り責めされる性器を立て続けに襲った。

ゾリッゾリッ、ジュリッ、ギチュッ、ギチュッ……剛毛の摩擦音と、革の軋む音を交互に立てて、無毛の秘裂を狼のペニスが嬲る。

一本の紐のようになって陰唇に咥え込まれた革帯の頂点では、刺激に反応して勃起してしまったクリトリスが、小さなポッチを浮き出させ、野獣の亀頭冠に掻き弾かれてプルプルと震わされている。

「グフルルルッ、マダマダコンナモンジャナイゼッ！」

抱きかかえた裸身から伝わる苦悶の痙攣に野獣の血を沸き立たせた狼男は、剛毛ブラシ状のペニスをさらに強く押しつけて腰を振った。

「んぐうぅっ！　あぐうっ、ぐ……おぁぁうんんんん～ッ！」

刺激が強烈すぎて、苦痛にしか感じない素股責めに、精液まみれの美貌が歪む。

他のモンスター達を一刻も早く射精させねばならないのだが、イラマチオの窒息感と、秘部をハードに擦り責められる衝撃で身体の自由が利かなくなりつつある。

「チンポ、手コキ……タマ、揉メ！」

ゾンビの一体は、随分たどたどしい口調で言いながら、青黒く変色した肉柱を強引に握らせて、手淫奉仕を強要してきた。

「ゴホッ、ぐ……う……ぐふうぅぅぅ……はぅ……んっ、ゲホッ、う、んむぅぅぅッ……」
イラマチオと素股で同時に責められながらも、神伽の巫女は震える指で死者の勃起を愛撫する。亀頭先端から滲み出る、黄色く濁った先走りを怒張全体に塗り込み、大きくふくれ上がった陰嚢を優しく揉みほぐすと、立ちのぼる腐臭が濃くなった。
（こいつら……精液まで腐ってるのか？　こんなのを顔に出されたら……）
揉み指に重く粘り着いてくる肉袋に溜まった、ドロリとした腐液の感触が、射精に対する嫌悪感を煽り立て、咲妃の美貌を曇らせる。
「オレハ、コノデカ乳ヲ犯スゥゥ！」
もう一体のゾンビは、青紫色に壊死した巨根を、胸の谷間に挿入してたわわな乳球を犯す。氷のように冷たい死者のペニスは、温かく柔らかな肉果を削り取らんばかりに摩擦し、強張った指は豊乳を荒っぽく揉みしだき、革帯越しにポッチを浮き出させた乳頭を撫で転がした。
「くぁ、そこぉ……くふううっ、んっんっんっ、はぁうううっ……！」
刺激を受けた乳首がジワリ、と母乳を滲ませ、革帯の緊縛が弛んだ。
「ンオオオッ、乳首、見セロォ！」
退魔装束の弛みに気付いたゾンビの指が、かろうじて乳先を護ってきた薄革の防壁を、ヌルリ、とずらし、隠されていた先端を剥き出しにする。
メイド喫茶での授乳試練以来、むず痒い疼きの収まらぬ乳首が、乳汁に艶めかしく濡れ

光って、ピョコンッ！　と飛び出してきた。絶好の攻撃目標を見つけた生ける死者は、親指の腹で、鮮やかなピンク色に充血した勃起乳首をグリッ、ゾリッ、と撫で転がす。
「くひぁ！　んあっ、ヒッ、ふぉおぅぅぅ〜ンッ！　で……るうぅぅッ！」
プシイイッ！　プシュルウウッ！　甘く引きつった声を上げた咲妃の乳首が小さなペニスのように脈動し、純白の乳汁を迸らせた。
「グヒヒヒィ……淫ラナ雌豚ダト思ッタラ、乳牛ダッタカ」
枯れ木の軋むような渇いた笑い声を漏らしたミイラ男は、喉を犯す腰の動きを速めながら、射乳痙攣中の乳首を摘んで揉み上げ、布地に包まれた指先で、とりわけ敏感な先端を掻き擦って責め立てる。目の粗い布地に擦られた勃起乳頭は、止めどなく母乳を噴き出して、ミイラ男の包帯をグッショリと湿らせた。
「グルルッ、コノ雌豚、オレタチニ嬲ラレテ感ジテイヤガルゼ！」
あからさまな反応に狂喜した狼男は、舌なめずりしながら腰使いをさらに速める。
獣のペニスと恥骨の間に挟まれた勃起陰核がギチギチと圧迫され、獣毛に覆われた狼男の下腹が、咲妃の白くまろやかな尻肉を打ち震わせて叩きつけられる。
膣内への挿入こそされていないものの、端から見ている者にとっては、悲痛な獣姦陵辱の光景が延々と続く。
「ガフウゥ！　コッチノ乳首ハ、オレガ舐メテヤロウ」
無尽蔵の体力を見せつけて素股責めを続けながら、狼男は長い舌を伸ばして、反対側の

乳首を舐め転がしてくる。
「ひううっ！　んっ、んんっ、きゅうううううんっ！」
ざらついた獣舌に舐めしゃぶられた勃起乳首は、たちまちのうちに甘美な痙攣を起こし、甘く温かな乳汁を噴き出して、陵辱者の喉を潤した。ブラシ状の獣根に擦られた秘部も、熱い恥液を溢れさせて、素股責めを続ける肉凶器を濡らす。
「オアァァァ、オレモ、挿レ……タイ」
ゾンビの一人が、咲妃の美脚を覆ったタイツの隙間に腐肉棒を突き挿れて抽送する。薄革のコスチュームと滑らかな太腿の間に挟まれて擦られた勃起は、膿（うみ）のような先汁をビュルビュルと溢れ出させ、ヌチュヌチュという卑猥な淫音を立てる。
ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ！　股間からも、はしたない摩擦音が上がっていた。
愛液を吸って重く濡れた革帯は、既に秘部を護る役割を放棄しており、毛むくじゃらのペニスの前後動に巻き込まれて捩れ、引きつって、濡れ革の軋むギチュギチュという音を立てながら、護るべき勃起陰核に絡みつき、責め立ててくる。
「オマ〇コガビクビク震エテイルゾ。痛メツケラレテ感ジルナンテ、マゾ雌豚ダナ」
言葉責めを交えながら、狼男は腰をグラインドさせ、剛毛が密生した肉柱で性器全体をこね回す。激しい摩擦を受け続けて充血度を増した大陰唇は、痛々しいほどの紅色に染まり、牡と女の体液に艶めかしく濡れ光っていた。
「くううううっ！　んふぅぅっ、ふぁ、んっ、ゴフッ、ぐ。うぐううっ、んっんっんっ！」

唾液を吸って生固さと太さを増した腐肉勃起に犯される喉奥から、鼻に掛かった甘い呻きを絞り出されながら、神伽の巫女は、革帯だけをまとった白い裸身を辱悦感に震わせた。

（怒りの視線を感じる……こんな無様な姿を……信司に見られている。くそっ！　なぜ、こんなに胸がざわめく？　どうしてあいつのことが気になるんだ!?　……どうして、こんなに哀しいんだ？）

モンスターどもに嬲られながら、咲妃は自分でも説明の付かない感情のうねりに戸惑っている。幽霊バスの一件以来、互いの間に生じてしまったぎこちないものを解消する間もなく、あのときの光景を再現するかのような状況で異形のペニスに奉仕し、犯されているのが、悔しく、そして哀しい。

（今は、どんな屈辱にも耐えるしかない。こいつらを射精させれば……この恥辱は終わるんだ。それが、神伽の巫女の責務……ッ）

友人達の眼前で繰り広げられる陵辱劇に終止符を打つべく、神伽の巫女は、押し寄せる快感と、込み上げてくる屈辱感に耐えて奉仕に没頭する。

「んふ、んむっ……ちゅぱ、ちゅぽっ、くちゅくちゅくちゅくちゅっ……あふ、あむ、んんんっ、じゅるっ、ゴホッ、くふうっ、じゅぷ、じゅぷ、じゅぷっ……」

太腿をキュッ、と閉じあわせて狼男の勃起を挟み込み、摩擦快感を増してやりながら、喉を犯す包帯巻きペニスを吸い上げ、生々しい弾力を増した肉茎に軽く歯を立てて刺激する。

（終わらせる！　一秒でも早く……こんな……辱めを……！）

焦燥感にとらわれながら、両手に握らされたゾンビの腐肉棒を扱き上げる速度を速め、膿汁を滴らせる亀頭を集中的に愛撫して、生ける死者に奉仕した。

「ソウ、ダ、イイゾ、淫乱雌豚メ！　モットモット、オレタチニ奉仕スルノダ」

モンスター達も負けじとハードな愛撫を強め、感度を増している咲妃の身体に容赦のない快感を送り込んでくる。

母乳を滴らせる乳首が摘んで捻り上げられ、揺れ弾む豊乳に指が深々と食い込んで、白い乳肌に揉み痣ができるほどの荒っぽさでこね回す。

「くぁ！　んおおおっ、はぁぁう、んんんん～ッ！」

「コノ雌豚メ！　オマ〇コヲ、コンナニグジョグジョニシヤガッテ。イキソウナンダロ？　意地ヲ張ラズニ、オレノチンポデ、イッチマエ！」

既に崩壊状態の秘裂を擦る剛毛ペニスは、巨大な亀頭で勃起クリトリスを集中的に弾き上げ、こね回して、鋭く痺れる女悦を送り込んでくる。

グチュグチュグチュギチュウッ！　ズリュズリュズリュルチュルンッ！

聞くに堪えない淫音を教室内に響かせ、甘酸っぱい愛液の飛沫を飛び散らせながら、とどめとばかりに秘部が嬲り抜かれた。

（くぅ……身体が、ダメだ、イクっ！　信司と有佳が見ているのに、絶頂……させられてしまうっ！　この私が……こんな奴らに……ッ！）

左右の乳首と喉粘膜を責められ、薄い革帯一枚に護られただけの勃起クリトリスを激しく擦り嬲られた退魔少女の身体を、抑えきれぬ絶頂の大波が襲う。
「やはぁぁぁ！　いっ、嫌ぁぁっ、ひぐうっ、んんんっ、イクっ……イク……ううッ！　やぁぁう……くはぁぁぁうぅぅぅん～っ！」
ミイラの勃起を呑み込まされた喉奥から艶めかしい絶頂の叫びを上げた咲妃は、全身をわななかせて恥辱のエクスタシーに舞い上がった。
革帯を咥え込んだ秘裂の隙間から、大量の愛液がジュワッ、と溢れ出し、ひときわ勃起を際立たせた乳頭が、純白の母乳を噴水のように噴き上げる。
「雌牛メ、ミルクヲ噴キヤガッタ。オレモ、出ルゾッ！」
イラマチオを仕掛けていたミイラのペニスが、喉の奥で不気味な脈動を開始し、冷たい腐汁で巫女の喉を穢し抜く。
「ぐちゅるっ、ちゅぶっ、ぐふううっ！　んぐううっ！　んんんん～ッ!!」
汚辱感と嘔吐感に苛まれながらも、絶頂によって理性の制御を離れた肉体は、喉をゴクゴクと鳴らして、強烈な匂いのする絶頂粘液を呑み込んでしまう。
「ウヲオォォォォォ～ンッ！　ウアァァァァ、出ルゾォォォ！」
奇怪な咆吼を上げた狼男とゾンビも、異形のペニスを脈動させて射精を開始した。火傷しそうに熱い獣の精汁が股間に弾け、豊乳の谷間には、冷たい腐汁がドプドプと吐き出される。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

仙獄学艶戦姫 NOBUNAGA!

ノブナガッ! comic

待たせたな

信長が、秀吉が、義元が、エッチにバトルにと漫画で大活躍！
もうひとつの『仙獄学艶戦姫ノブナガッ!』がここにある!!

毎月中旬
発売!!
18歳未満の方は
購入できません
18

漫画：老眼
原作：斐芝嘉和
キャラクター原案：SAIPACo.

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス
『闘神艶戯』偶数号にて連載中！

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

女幹部メル様のセカイ征服計画！

［小説：高岡智空／挿絵：鈴眼依縫］

全国書店で好評発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー

イケない戦いの記録！

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

［小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃］

全国書店で好評発売中

「…藤田君は責任取るべき」

睦月への想いに身を焦がすマキナ

彼女は夜の教室で……!?

宇宙海賊学園ブラックキャット

［小説：Kyphosus／挿絵：さしまかよ］

全国書店で好評発売中

生徒会長の裏の顔は宇宙海賊!

海賊少女の痴態が宇宙を駆ける!?

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガッ! ①〜③
- 呪詛噛らい噛【カースイーター】
- 魔海少女ルルイエルル
- 借金お嬢クリス ①〜3
- 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
- ビルグリムメイデン ①〜②
- 不死の吸血鬼がドSのご主人様を募集しているようです
- 絢爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！
第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園――西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!!　平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで――!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 弐
北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾〈美姫〉景虎、宇佐美〈奈々〉定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!!　敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参

信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

BLANGEL

輪になりて踊る愚者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●夜士郎
原作・挿絵●渡瀬行人

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田睦月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！　ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する!

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

思春期なアダム2 背後をねらう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、睦月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！“蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、睦月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

借金お嬢クリス
42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円！　クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに！　果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス2
42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!?　水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍（?）に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!